

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：33908

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2023

課題番号：17K02826

研究課題名(和文) 文副詞・連結副詞類の理論的考察と習得実験研究

研究課題名(英文) Theoretical Study of Sentential/Linking Adverbials and SLA

研究代表者

都築 雅子 (Tsuzuki, Masako)

中京大学・国際学部・教授

研究者番号：00227448

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：文副詞・談話辞・強調副詞など多様な用法をもつreally, actuallyなどの副詞類に焦点を当て、NICT JLEコーパス(日本人学習者へのインタビューによる英語能力試験(2004)などを用い、日本人英語学習者の習得状況を分析した。その結果、それらの副詞類を英語運用能力が低い学習者(TOEIC750点/TOEFL580点未満)はほとんど使用しないが、運用能力が高くなると多様な用法を頻繁かつ有効的に使用できるようになることが示唆された。またindeedに関して、日系英国人作家Kazuo Ishiguroによる小説での使用を分析し、ポライトネス効果を示す使われ方がされていることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

really, actually, in fact, indeedなどの副詞類は、強意副詞・文副詞・談話辞など多様な用法を有し、多くの用法が重複しているため、その使い分けは複雑で難しい。一方で、それらは逆接など談話の構成や展開の仕方を示す、聞き手に共感を訴えるポライトネス機能を有するなど様々な談話機能を有するため、パラグラフ・ライティングにおける論理展開や対面会話における円滑なコミュニケーションの鍵となる。それらの用法の習得状況を分析・考察することは意義がある。

研究成果の概要(英文)：Focusing on adverbs such as 'really' and 'actually', which have a wide variety of uses including sentential adverbs, linking adverbs, and discourse verbs, we analyzed and discussed the acquisition and learning status of Japanese learners of English(JLE), using a corpus of English utterances of JLE in interview-style tests. The results suggest that as English proficiency increases (TOEIC score of 750/TOEFL score of 580 or higher), Japanese learners are able to use a wide variety of 'really' and 'actually' as frequently and effectively as native English speakers. We also analyzed the use of 'indeed' in the novels of Kazuo Ishiguro, a Japanese-British novelist. It was suggested that there is a specific use of "indeed" in the novels, which shows a politeness effect.

研究分野：英語学

キーワード：談話辞 文副詞 前置詞句 移動構文 第二言語習得 英語学習

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

really, actually, in fact, indeed など代表される前置詞句・副詞類は、それぞれ文副詞、連結副詞、談話辞など、多種多様な用法を有し、さらに多くの用法が重複しているため、それらの副詞類の使い分けは複雑で難しい。一方、それら副詞類は逆接など談話の構成や展開の仕方を示す、聞き手に共感を訴えるポライトネス機能を有するなど、いわゆる談話に関わる機能を有する。そのためパラグラフ・ライティングにおける論理展開や対面会話におけるコミュニケーションの展開において、それら副詞類の適切な使い分けは英語による円滑なコミュニケーション(文語と口語両面における)の鍵となる。すなわち、それら副詞類の用法の学習・習得は、用法が多様で、談話などにも関わるため難しいが、日本人学習者の英語運用能力向上のためには必須の課題である。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、談話に関わる用法など多種多様な用法を有する actually, really, in fact, indeed など文副詞類・連結副詞類などに関する理論研究と習得研究を連携して行うことにより、日本人英語学習者のこれら副詞類・小辞類の習得実態の状況と問題点を明らかにし、それをもとに、円滑なコミュニケーションに不可欠なこれら副詞類の効率的な教育・学習方法の模索・提案をしていくことである。

(2) 副詞類・前置詞句類・小辞類の研究に関連して、英語の移動構文や結果構文に関して、特に英語に特徴的な様態動詞および、完結的なアスペクト特性を有する小辞・前置詞・形容詞類に焦点を当て、日本人学習者が不得意とされる構文特性を分析・考察し、教育・学習方法を探っていくことも行う。移動構文に関する日本人学習者の習得状況に関しては、Spring and Horie (2013) の研究成果をもとに適切な教育・学習状況を探っていく。

3. 研究の方法

(1) 都築(2016)などにより、口語表現としてよく用いられることが確認された really と actually に焦点を当て、日本人英語学習者がどのように really, actually の二つの副詞類を使用しているのかについて考察する。英語によるインタビュー形式の試験における日本人学習者の受け答えのトランスクリプションを集めた「英語発話コーパス (National Institute of Information and Communications Technology/ Japanese Learner English Corpus)」からデータを採集し、1) どのような機能・用法でそれら副詞類を用いているのか、2) 英語力の違いが副詞類の使用に関与するのか、の2点について分析・考察した。その考察結果を 11th ELF 国際大会 (King's College London, 2018, 7/4-7) で発表した。

(2) 併せて、really と actually に関して、英語母語話者(幼児)の自然発話データコーパス CHILDES を用いて、英語母語話者の第一言語習得の経過状況について分析し、その考察結果を Bong and Tsuzuki (2018) で発表した上で、論考をまとめた。

(3) 文語表現でよく使われる indeed に関して、日系イギリス人 Kazuo Ishiguro の小説において、どのような使われ方がされているかについて、各小説の生起数と生起場所などを中心に、分析・考察した。その結果を IAWE 第 21 回大会(Limerick University, Ireland 6/23/2019)で発表した。

(4) 小辞・前置詞句類に関する研究ということで、英語の移動構文や結果構文に関して、特に英語に特徴的な様態動詞および、完結的なアスペクト特性を有する小辞・前置詞・形容詞類に焦点を当て、日本人学習者が不得意とされる構文特性を分析・考察した。移動構文に関する日本人学習者の習得状況に関して、Spring and Horie (2013)により、英語力の高さ (TOEFL500 点以上は上級レベル、それ未満を中級レベル)に関わらず、日本人学習者は様態動詞による移動構文を使用しない傾向にある、英語圏滞在歴が 1 年以上になると、様態動詞による移動構文の使用が増えること、などが明らかになっている。以上の分析をもとに、ジャンル・レジスターの観点から考察し、適切な教育・学習方法を探った。

(5) 2020 年度よりコロナ禍の影響および代表者が本務校で学部改組のため新学部 (国際学部) 配属、分担者も本務校が変わるなどで多忙を極め、副詞類に関する日本人学習者への実験研究を行うことができなかった。

4 . 研究成果

(1) 2018 年度は、英語によるインタビュー形式の試験における日本人学習者の受け答え音声録音のトランスクリプション (1281 例)を集めた「英語発話コーパス (NICT:National Institute of Information and Communications Technology/ Japanese Learner English Corpus)」からデータを採集し、日本人英語学習者がどのように really, actually の二つの副詞類を使用しているかについて分析・考察した。その結果、(1) really, actually とともに、英語運用能力の高い学習者 (TOEIC750 点/TOEFL580 点以上)は、低い学習者 (TOEIC750 点/TOEFL580 点未満)に比べ、頻繁かつ有効的に用いており、運用能力が上がるにつれ、自然に使えるようになる、(2)英語運用能力の高い学習者は really, actually とともに、英語母語話者と同じように、強調の副詞、認識文副詞、連結副詞、応答表現など、多様な使われ方がされていることがわかった。以上の考察をまとめ、11th INTERNATIONAL CONFERENCE OF EL F (King's College London, 2018, 7/4-7)で発表した。また併せて、really と actually に関して、英語母語話者 (幼児) の自然発話データコーパス CHILDES を用いて、英語母語話者の第一言語習得の経過状況について分析・考察した。その結果、「really の方が actually より早く習得され、その状況は養育者による質的なインプットに概ね比例している」ことがわかった。その考察結果を Bong and Tsuzuki (2018)で発表し、論考をまとめた。

(2) 2019 年度は、indeed に焦点を当て、日系イギリス人 Kazuo Ishiguro の小説での使われ方に関して、分析・考察した (Ishiguro は日本で生まれたが、親の職業の関係で幼いころに英国に移り、その後英国人作家として数々の小説を執筆し、ノーベル賞を始めとして多くの賞をとっている) その結果、indeed の使用は、Ishiguro の小説の中でも、「An Arts of the Floating World」と «The Remains of the Day»に特に多く、154 例、145 例におよぶ、それらの小説は、前者は長崎を連想させる架空の町を舞台とした戦前の思想をもち続けた日本人を描き、後者は英国の

老執事を描いており、indeed などの使用にある種の伝統性・ポライトネスの効果を生み出している、「The Remains of the Day」では、文頭で使用される例に特化していることがわかった。以上をまとめ、IAWE 第 21 回大会(Limerick University, Ireland 6/23/2019)で発表した。(2020 年度よりコロナ禍の影響、および代表者は本務校で学部改組のため新学部配属となり、分担者も本務校が変わるなど、多忙を極め、実験研究を行うことができなかった。研究計画の延長をしたものの、結局できなかった点は残念である。)

(4) 2023 年度は、英語に特徴的な結果構文や移動構文を形作る小辞・前置詞・形容詞類に焦点を当て、日本人学習者が不得意とされる結果構文や移動構文の特性を考察し、日本語との違いに焦点をおく学習・教育方法を探った。移動構文に関する日本人学習者の習得状況に関して、Spring and Horie (2013)により、(1)英語力の高さ(TOEFL500 点以上は上級レベル、それ未満を中級レベル)に関わらず、日本人学習者は様態動詞による移動構文を使用しない傾向にある、(2)英語圏滞在歴が 1 年以上になると様態動詞による移動構文の使用が増えること、などが明らかになっている。滞在歴が要因となる理由として、様態動詞による移動構文や結果構文がゲルマン諸語に特化する構文であり、ゲルマン本来語が英語語彙の中での第三層、すなわちレジスターとして日常生活で使用される日常語彙である(堀田 2012)ことが考えられる。さらに、様態動詞により移動・変化・行為に加え、その様態まで描写できる移動構文・結果構文は小説・ナラティブのジャンルで多用されることが予測される。COCA コーパスによる調査を行い、その点を確認した。以上の点から、様態動詞による移動・結果構文の習得には英語圏の子供用の絵本や物語および英語学習者用の Graded Readers (物語分野)のリーディングの有効であると論じた。以上の結果を、JACET 中部支部第 2 回定例研究会(2024 年 3 月 2 日 名古屋市立大学)で発表した。また論考をまとめ、中澤・大室編『英文法を活かす』(開拓社、2024 年出版予定)に掲載予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計18件（うち査読付論文 9件 / うち国際共著 3件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 都築雅子	4. 巻 1
2. 論文標題 結果構文	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 言語理論・言語獲得理論から見たキータームと名著解題	6. 最初と最後の頁 26-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Chung Bohyon & Bong Hyun Kyung Miki	4. 巻 19
2. 論文標題 A Study on the Intelligibility of Korean-Accented English : Possibilities of Implementing AI Applications in English Education	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 The Journal of AsiaTEFL	6. 最初と最後の頁 197-2022
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18823/asiatefl.2022.19.1.12.197	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 都築雅子	4. 巻 なし
2. 論文標題 to deathの強意読みについての一考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語分析のフロンティア	6. 最初と最後の頁 231-244
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 都築雅子	4. 巻 なし
2. 論文標題 結果構文の強意読みと慣用表現	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 慣用表現・変則的表現から見える英語の姿	6. 最初と最後の頁 126-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 都築雅子	4. 巻 なし
2. 論文標題 結果構文のプロトタイプと疑似結果述語	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本英文学会2017年度支部大会Proceedings	6. 最初と最後の頁 211-212
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 都築雅子	4. 巻 なし
2. 論文標題 to deathの強意読みについての一考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語分析のフロンティア	6. 最初と最後の頁 231-244
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Bong, H. K. Miki & Tsuzuki, Masako	4. 巻 -
2. 論文標題 A Study on Adverbs: Really and Actually	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 the 2017 International Conference Proceedings of English Teachers Association in Korea (ETAK)	6. 最初と最後の頁 145-153
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Bong, HyunKyung	4. 巻 2017年度版
2. 論文標題 Lemmatic Properties of Adverbial Particles	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 The 22nd PAAL Conference Proceedings	6. 最初と最後の頁 36-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計13件(うち招待講演 0件/うち国際学会 9件)

1. 発表者名 都築雅子
2. 発表標題 英語移動構文・結果構文の考察と英語教育への含意
3. 学会等名 JACET中部支部第2回定例研究会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Bong, HyunKyung(奉 鉉京) & Chung, Bohyon
2. 発表標題 Adverbial Particles, Phrasal Verbs
3. 学会等名 2023 ETAK Colloquium (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Bong, HyunKyung(奉 鉉京)
2. 発表標題 The Imprtance of Lemmatic Properties of Prepositions and Adverbial particles in the Second Language Acquisition of English Phrasal Verb
3. 学会等名 2023 HICCELS (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 ong, H.K. Miki & Tsuzuki Masako
2. 発表標題 Transcendent Cultural and English Creativity in the First Generation Migrant Author: Observing English from a Slight Distance.
3. 学会等名 21st Conference of the International Association for World Englishes (国際学会)
4. 発表年 2019年

1 . 発表者名 Tsuzuki, Masako & Bong, HyunKyung (Miki)
2 . 発表標題 Use of Really & Actually by Japanese speakers of English: Based upon the Corpus Data of English Spoken by Japanese
3 . 学会等名 11th English as Lingua Franca (ELF 11) Conference at King ' s College London (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Bong, HyunKyung (Miki) & Tsuzuki, Masako
2 . 発表標題 A Study on the Uses of Adverbs (Really & Actually) and Adverbial Particles (up & on) Based on the NICT JLE Corpus Data
3 . 学会等名 13th Teaching and Language Corpora (TALC 13) Conference at Cambridge University (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Bong, Hyunkyung & Tsuzuki, Masako
2 . 発表標題 A Study on Adverbs: Really and Actually
3 . 学会等名 2018 English Teachers Association in Korea (ETAK) Annual Conference (国際学会)
4 . 発表年 2017年

1 . 発表者名 Bong, Hyunkyung
2 . 発表標題 Lematic Properties of English Adverbial Particles
3 . 学会等名 The 22nd International Conference of Pan-Pacific Association of Applied Linguistics (PAAL) (国際学会)
4 . 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	奉 鉉京 (Bong HyunKyung) (50434593)	立命館大学・国際関係学部・教授 (34315)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------